

昭和二十六年

父還曆につき今年より吾家長となる

歳棚に今年家長の灯を献ず

古里の林泉シマの初日に漱ぐ

新府城めぐる霜林囀鳴く

南中の日を梢ウレにして落葉掃く

梨大付属小K君来庵

冬風や画紙がましろく日をはじく

雪嶺を描く冬帽をまぶかに

我ツルゲーネフを愛読す

読みさしの「漁人日記」春を待つ

この頃より難聴特別ひどくなる

聾々の一人はやすし野を焼ける

豊頬をつゝみてあます冬帽子

信州 洪の湯

灯をつらね温泉の坂道風花す

暖雨止む裾濃スソコの富士を簷近ノキく

班雪嶺ハダラネのそそる濃藍鳶めぐる

日は午の卒業の門乾風吹くナライ

棕栲花を垂りて季節の東南風吹くタツミ

胸乳揺り朝の繩とび夏時間ムナヂ

ほたるとび貧しき夕餉匂はする

ほたる籠のぞくかぼそきうなじのべ

花柿のそよぐ天蓋山雨来る

児等が去る西日にかわく甘茶佛

水冷えて蜘蛛は夕べの圍にのぼる

和金魚飼ワキンい少年貧をすこやかに

深梅雨のひまの黎明月巨き

虹美タツキし生活の鍬を立て、妻

林芙美子急逝

未咲ウラきの葵を供華に芙美子の忌

揚羽来て凌霄風ノイゼンに揺れやすく

灯籠に土の香高き雨少し

この年五月峡北雲母支社結成（蛇笏先生の来臨をうる）  
花桐の月のやすらい色深く

炎天へ洋傘<sup>カサ</sup>をパチリと債鬼去る

子等病めば

帰燕鳴き手盛食う飯やもめく

「聞けわだつみの声」

流燈すわだつみの声高まり来

長男、三男ともに重病三句

炎天へ不吉の思念ふりとばす

月澄めり汝<sup>ナレ</sup>父人事盡くせるや

躰を去る死魔の梵音夜が白む

秋の繭朝夕霧にうるほえり

盆燈籠無縁の墓のうら照らす

土は冷え天はやすらか大根蒔く

繭をえるひくき秋灯ぬくみあり

墓燈籠光をかたみに更けいたり

山霧のおりいてあそぶ月供かな

稻架に月田の神おくる餅をつく

麦種子をおとしつついつか月夜なる

山棲みの狭き星座も冬に入る